

福祉系 対人援助職養成の 現場から²²

西川 友理

地域のこども祭りにて

学校近くの自治会主催のこども祭りで、学生たちが、一つのブースを担当させていただくことになりました。

あれこれ考えて、古新聞を使い紙鉄砲や帽子を折る折り紙コーナーを運営することにした学生たちは、当日までに折り紙の練習をしたり、教え方を考えたり、看板を作ったり、色々と準備を重ねました。

「小学生が新聞折り紙を喜んでくれるかなあ、大丈夫かなあ」と、実は少し不安だったのです。

が、いざ当日になると大盛況。

1時間半の間に約150人もの子どもが集まり、

「帽子出来たー！」

「どう、かっこいい？」

「おお、紙鉄砲鳴ったー！」

「鳴らへん！なんでっ？どうしたら鳴るの、これっ？！なあ、おーしーえーてーっ！！」

と、ワイワイ楽しんでくれました。

学生たちは子どもの年齢や理解度を勘案して、時には折り方を教え、時には目の前で作ってプレゼントし、時にはどっちが大きい音が鳴るか子どもと本気で勝負し…と、てんてこ舞いの忙しさでした。

大きな声を張り上げる学生A君。

「はいどうぞー！紙鉄砲つくるんやったらこっちやでーっ！」

その声に驚き、

「A君のそんな大きな声、初めて聞いたわ！授業中当ててもぼそぼそっ…と喋るのに！」と私が言うと、

「だってお祭りやもの。声出さないと聞こえないでしょう！」とニコニコしているA君。

折り紙コーナーに訪れた証明として、子どもが持っているカードにハンコを押す係りの学生Bさん。

ハンコを押す時に「どんなのを作ったの？」「やあ、かわいいのが出来たねえ！」等、子どもに色々話しかけていました。

「何かいいね、そうやって話すの」と声をかけると、

「だって、ハンコ押すだけなんて寂しいですもん。ちゃんとコミュニケーションしたい。せっかく来たんやから、このちょっとした時間だけでも、楽しい気持ちになってもらいたいな、って。」

普段はおしゃれなギャル系の服を着ているCさんも、今日はジャージ。躊躇なく地面に膝をつき、泥だらけ。子どもに話しかけつつ、子どもを連れてきた親御さんにも上手に説明し、人員整理をしています。

担当時間が終了し、学生撤収まであと数分、という時。

幼稚園くらいの女の子が、学生Dさんに「帽子、作りたい」と言いに来ました。

Dさんは一瞬悩みました。もう周りの学生は片付け始めている。でも、作りたいとわざわざ言いに来た子どもがいる。

この年齢の子に教えるとなると、結構時間がかかる。しかし、作る時間はない。

その時、その子どもの持っているバッグにピカチュウのキャラクターを発見したDさん。

「ピカチュウ、好き？」「うん！」

「ピカチュウなら折れる！」と判断したDさんは手元にあった黄色い折り紙で急いでピカチュウを折り、

「じゃあ、このピカチュウのお顔、描いてくれるかな」とペンを渡しました。

顔を描くくらいなら、子どもでも、ものの10秒で描けます。

そしてストックしてあった帽子の完成品に、ピカチュウをホチキスで留めて、「出来たよ、ピカチュウ帽！」と、子どもにかぶせました。

「かわいい！ありがとう！」その子は満面の笑顔を見せてくれました。

社会人には、 主体性が求められている

社会人には主体性が必要、という言葉は、テレビや新聞、あるいは経済雑誌などで、日頃からよく目にします。

「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、経済産業省が2006年から提唱している「社会人基礎力」を構成する12の能力要素の中でも、特に仕事全体に関わってくると言われているのが主体性です。

株式会社AIDEMが、2015年3月に、企業の新卒採用業務担当者1000名を対象に行ったアンケートでは、新入社員に求

める能力として、社会人基礎力の中でも特に「実行力」と「主体性」が突出して求められていました。

では改めて、「主体性」とは何なのでしょう。

主体性に似た言葉で、自主性や自発性があります。

今回この文章を書くにあたり、改めて辞書で言葉の意味を確認しました。

それによると、自主性は「自分の判断で行動する態度」となっています。また、自発性は「他からの影響・教示などによるのではなく、自分から進んで事を行おうとすること」となっています。

これに対して、主体性は「自分の意志・判断によって、自ら責任をもって行動する態度や性質」となっています。

主体性という言葉には、自主性や自発性と比して、「自ら責任をもって」行うという点が重要なようです。

主体性に基づく行動には、大なり小なり、責任がともなう事を自覚する必要があると確かに私も考えます。

しかし、社会人に求められている「主体性」には、上記の辞書に記載されている言葉だけでは足りないと思うのです。

社会人に 求められている主体性とは

例えば、先ほどのDさんについて。

彼女はその時、皆と一緒にその場を片付けている真っ最中でした。しかし、その場に来た女の子の言葉を聞いて「私は子どもたちを楽しませるために、今日こ

こに来ているのだ」という自分の役割、自分が今そこにいる「目的」を果たそうとしました。と同時に、周りの「状況」を見て、「いや、今から帽子は作れない」と判断しました。では何が出来るのか、と、とっさに考え、その考えに基づいて、行動しました。

この女の子は、「帽子作りたい」と言ってきました。しかし、結局帽子は自分で作っていません。Dさんが作ったピカチュウに顔を描き、Dさんに渡しただけです。

もしかすると女の子は、帽子の作り方を知りたかったのかもしれませんが。あるいは、自分で作った帽子が欲しかったのであって、人からもらうのは嫌だったのかもしれませんが。どちらの場合も、女の子は帽子を渡されても、不満を持ったことでしょう。

しかし、Dさんは実際に女の子から笑顔をもらったのです。

「大改造！！劇的ビフォーアフター」という番組があります。

古くなったり、家族の状況にあわなくなったりといった、その家族が住むには何らかの問題がある家を、匠と呼ばれる建築士や大工がリフォームする過程を流す、ドキュメンタリータッチのバラエティ番組です。かなり有名な番組なので、見た事がある方も多いと思います。

匠は毎回変わりますが、どの匠も依頼主の今抱えている問題を解決しようと奮闘します。リフォーム後、依頼主が新しい家を見ると大抵、思ってもみなかったいいリフォームだ、と驚き、感動して

いるように見えます。当初の問題の解決だけではなく、いつも何かのプラスαがあります。

番組ホームページには「ただ見た目を改造するだけが匠じゃない。大改造というテーマを通して、家族の絆が生まれたり、新しい発見や感動があったり。そんな『心の中の改造』までやってしまう、それが『大改造！！劇的ビフォーアフター』の本当のテーマなのです。」と書いてありました。

この番組におけるリフォームは、単に依頼主の家に関する問題を解決する事ではなく、リフォームを通じて「家族の絆」「新しい発見や感動」を生み出し、その過程を見せるという「目的」を持ち、TV番組という制約、リフォーム予算、依頼主の思い、そして建築に関する法制度などの様々な「状況」を踏まえて、行われているものなのです。

このように、主体性には、「自分が何をすべきか考え、その考えに基づいて責任ある行動をとる」前に、「その目的は何か」「今どういう状況か」を把握するプロセスが欠かせないと私は考えるのです。

単に「自分の意志・判断によって、自らから責任をもって行動」するのは、ただ自分勝手に独りよがりな行動になりやすいのではないのでしょうか。特に仕事において、その目的を見失い、どういう状況にあるのかよくわかっていない状況で「自分で責任をとる！」と行動されると、かなりの確率で、周囲に迷惑を及ぼす結果になってしまうと思うのです。

Dさんの例は、単に女の子の言葉に振り回されるのではなく、女の子と周囲の状況をよく見て、「その目的と、その状況において、自分の意志・判断によって、自ら責任をもって行動」した結果、女の子が満足する結果を引き出すことが出来ました。

「ビフォーアフター」は、匠の皆さんがその時々で状況を見失わず、リフォームをしているところを映している番組だから、2002年から今日まで、長く愛されているのだと思います。

ですから、主体性とは「その目的と、その状況において、自分の意志・判断によって、自ら責任をもって行動する態度や性質」と考えられるのです。

利用者主体と、 対人援助職の主体性

福祉系対人援助職として働く時にも、主体性が重要だと私は考えています。

…と、このように言うと、社会福祉分野の人には、違和感があるかもしれません。なぜなら、社会福祉には「利用者主体」という言葉があるためです。

この言葉をそのまま受け取ると、支援における主体は利用者にある、という考え方に見えます。そうすると対人援助職の主体性、という言葉には、なんとなく後ろめたさを感じるのではないかなと思います。

雑誌で、こんなエピソードを読んだことがあります。

ある和風旅館で、お客様がワインを注

文しました。従業員が「あいにくワインは置いておりません」というと、お客さんは怒ってしまいました。そこでその従業員は町内を走り回って、ワインを探しました。

あいにくお盆休みの真っ最中、懇意にしている老舗の酒屋さんはお休みです。やっとワインを見つけたのはコンビニでした。早速そのコンビニでワインを購入し、急いで帰ってお客様に提供しました。

するとお客様は「何だよ、あるんだったら早く持って来いよ」と不満そうに言いました…。

こういったことは、福祉業界でもよくあるのではないかと思います。

利用者主体とは、単純に利用者がそうしたいと言ったから、支援者が従者となり、その通りにする事ではありません。

また、支援者が自分の価値観・価値基準に基づいて援助する事はありません。

利用者の立場や視点に立って、利用者の自己決定を尊重する態度の事です。

お客様の言葉に従って行動をしたのに、お客様を不愉快にさせてしまった旅館の従業員は、お客様の「ワインが欲しい」という言葉に対応せんがため、その旅館のサービスの「目的」を見失ってしまい、主体性のない行動になってしまったのです。

この旅館がどのようなサービスをすることが「目的」かきちんと見据え、出来る事出来ない事は何か、「状況」を把握して対応することが、大事だったので

はないでしょうか。

福祉サービスも同じです。「目的」は何か、福祉制度に出来る事、出来ない事、そしてその利用者は何をどうしたいと考えているのか、それらの「状況」を踏まえた上で、対人援助職の私が今出来る支援は何だろうかと考え、利用者へ介入する。対人援助職の主体性とは、こういった態度や性質の事です。

それはまさに、利用者の思いや考えを踏まえた、利用者主体の支援になります。

つまり、支援者が主体性を発揮することで、利用者主体の支援ができるのです。

だからこそ、福祉系対人援助職にも、主体性が必要と考えるのです。

このように、目に見える「主体」という字面が同じなので、間違えそうになりますが、「支援者の主体性」と「利用者主体」にそれぞれ使われている「主体」は、全く別の意味なのです。

よりよい支援のために、 主体性を身につける。

児童養護施設の職員だった頃、ある中学生への支援がどうしてもわからなくて、困りに困って、上司の前で、絞り出すように、

「結局、何が正しいやり方なんですか。答えを下さい！」

と言ってしまった事があります。

とにかく前が見えなくて、どうすれば良いのかわかりませんでした。頭では「答えはない」という事がわかっていました。また、仮に上司がその時「こうす

るといい」と何かの手段を伝授して下さったとして、その方法が自分に出来るのかというと、そうとは限らないこともわかっていました。

これでいいよ、というマニュアルのような、何も考えずに「こうするといいと言われたからそうする」というような“答え”が、その時は本当に本当に欲しかったのです。

それは、主体性を放棄した、無責任な態度であったと今さらながら思います。

また、同じ職場で、ある先輩が退職する時に、「あなたは、もっと自分を出してごらん。そしたら、もっと仕事が楽しくなるよ」というメッセージを下さったことがありました。

その時は、自分を出すとはどういうことなのか、全く意味が解りませんでした。

今考えると、自信のなさから回りの様子や顔色ばかり見て、仕事の「目的」を見失い、「状況」に振り回されがちだった自分に対して、「そんなにビビらなくてもいい、もっと主体性を発揮していいんだよ」という事を伝えてくださっていたのだとわかります。

対人援助の現場では、目の前の事に手いっぱいになり、他人に責任をなすりつけてしまったり、「目的」や「状況」を把握することを忘れてしまったり、といった事もあると、私自身の経験からも感じます。

近視眼的な、対処療法的な、マニュアル的な支援では、利用者主体の支援をすることは難しいのに、それを求めて誤ってしまうのです。

だからこそ対人援助職は、利用者により良い支援をするために、主体性を身につける事が必要だと思うのです。

対人援助職を目指す学生が主体性を身につけるために、養成校の教員が出来る事は、

- ①安心できる状況か、安全な状況か、学生自身を含めた状況を見極める事
- ②見極めた上で、可能ならば、それぞれの在りようを認め、信じ、任せる事
- ③学生が発揮した主体性にプラス評価をする事

この3つではないかと考えています。

安心と安全と自己肯定感

安心・安全とは、学生の周囲の環境や社会関係を指すだけではなく、学生の心身の安心・安全をも指します

つまりその学生に、自らの置かれている環境に対する信頼と、自身に対する信頼が、一定程度保たれている必要があるのです。

そのため、教員は、学生が安心・安全でいられる学習環境を整えるように配慮します。

「いつも」

それは、日々学生をよく見て、学生の意見をよく聞き、不安定な状況に陥っていないかと確認することです。

不安定な状況に陥っていない、安定しているという判断が出来るならば、学生それぞれの在りようを認め、信じて任せます。

学習環境や、学生の心身に不安定な状

況があるように見受けられるならば、授業の方法を改善したり、スクールカウンセラーと連携して対応したりと、その学生が本来の在りようを取り戻せるように働きかけます。

学生の日々の経験の積み重ねを大切にし、評価することが、その学生の自己肯定感を育てる事になると実感しています。

自己肯定感とは、いわゆる自尊心のことです。自分が価値ある存在だと感じられる事です。無条件に愛され、認められることで育ちやすいといわれています。生育暦に大きく影響されるものですが、成長してからでも育てる事は出来ます。

自己肯定感が育つことは、主体性の醸成に大きな影響を与えます。主体性を発揮し行動する時の勇気という、根源的な力になります。

教員が気をつけること

ただし、何度も書いた通り、学生が「目的」を見失ったり、「状況」を把握できなかったり、自己満足的な自己肯定感にならないように、教員は2つの事に気を付けなければなりません。

ひとつは、その学生のこれまでの人生経験に敬意を払い、考え方を尊重するという事です。

誰にでも、それまでの人生の中で得てきた経験に基づき自ら培った判断基準があります。わずか5歳の子にも、判断基準があります。ましてや20歳前後に

もなればなおさらです。

知識、スキル、良心、善意、公共心、正義、自分を大切にすること、他人を尊重すること、ルール、モラル。また、これらを破っても大切にされた方が良いと思う事…それらは個々人が培ってきた、いわばこの世の中を計る時の“物差し”のようなものです。また、それまでの授業で教員らが教えたことも、その学生の物差しのひとつの目盛りとして刻まれています。

その物差しを信じて任せてしまうほうが、「こう考えて、こうしなさい」と押し付けるより、長い目で見ると、学生にとって得る物が多いように感じています。学生自身が考え、行動した経験からは、学び取るものが多いと思います。

さすがに自傷行為や、公共の福祉に反する行動に対しては、抑制する必要がありますが、単純に、成功すれば良い、失敗すれば悪い、という話ではありません。大失敗したことで「あれは、勉強になった」としみじみ学生が語った事も多々ありました。

もうひとつは、豊かな対人関係を築けるような環境にする事です。

判断基準のという物差しは、他の人の物差しと出会い、相互作用することで、新たな物差しのあり方に気づき、学び、伸長していきます。

様々な物差しを持った、あらゆる世代の人と、お互いを尊重しあい、交流する。

それはその学生にとって支持的なものばかりではなく、うるさい人も嫌な人も面倒な事柄もあるでしょうが、その相互作用を積み重ねることによって、個々

が持つ物差しは、より伸長され、多様に変化します。

するとまた、お互いの物差しの存在を認めやすくなると同時に、自らの変化を受け入れる姿勢が生まれていくのです。これにより、変化への恐れが低減し、変化のよさにも気づき、さらに主体性も培われていきます。

この2つは、対人援助職としてクライアントに対応する時にも必要な事です。

教員がこの2つを大切に学生と関わっていると、やがて学生達もお互いを信じて動き、人とのつながりを活かしていくようになります。さらには、お互いを尊重していくようになると感じています。

どんどん主体性を発揮する学生

「紙鉄砲」のサンドイッチマンになったE君は、次々来る子ども達と紙鉄砲を作り、変な格好で鳴らしたり、子どもに勝負を挑んだり…。

子どもと一緒に作り上げた紙鉄砲を、力を込めて、パーン！と鳴らすE君。

それを見た子ども達も、思いっきり、パーン！！子ども達を連れてきたお父さんも、パーン！！

お互いにえへへ、と笑っています。

後日E君は、この経験を振り返り、語って聞かせてくれました。

「最初、準備段階では紙鉄砲なんてしようもない…とっていたけれど、やってみたら面白かった。面白いと思ったら、子どもにもしてもらいたくなっただけで

す。今の子、知らないんですよ、紙鉄砲の作り方。ビックリしました。」

「紙鉄砲をたくさん持って、歩き回って…まずは会場のいろんなところで、子どもたちにやってもらったんです。面白さを目の当たりにしないと、面白いと思わないでしょ？」

「面白いと思ってもらうためには、自分が楽しい姿を見せることが、一番いいかなと思って。子どものお父さんも巻き込んだり、一緒にはしゃいで見せたり…。」

「子どもら、めっちゃ喜んでくれました。よかったですわ！！」

このE君も、「目的」を認識して、子どもをよく見て、「状況」を踏まえて、何をどうするか考えて動く。主体性を発揮していました。

「何やねん、君らすごいやん！」

学生は自分でどんどん新たな行動を見せてくれます。その場に来た人々との相互の関係性の中から、どんどん新たな主体性が発揮されているのです。

お互いのやり取りができる社会関係の中で、この人たちはどんどん自分の主体性を磨いていくんだな、と改めて感じた経験でした。